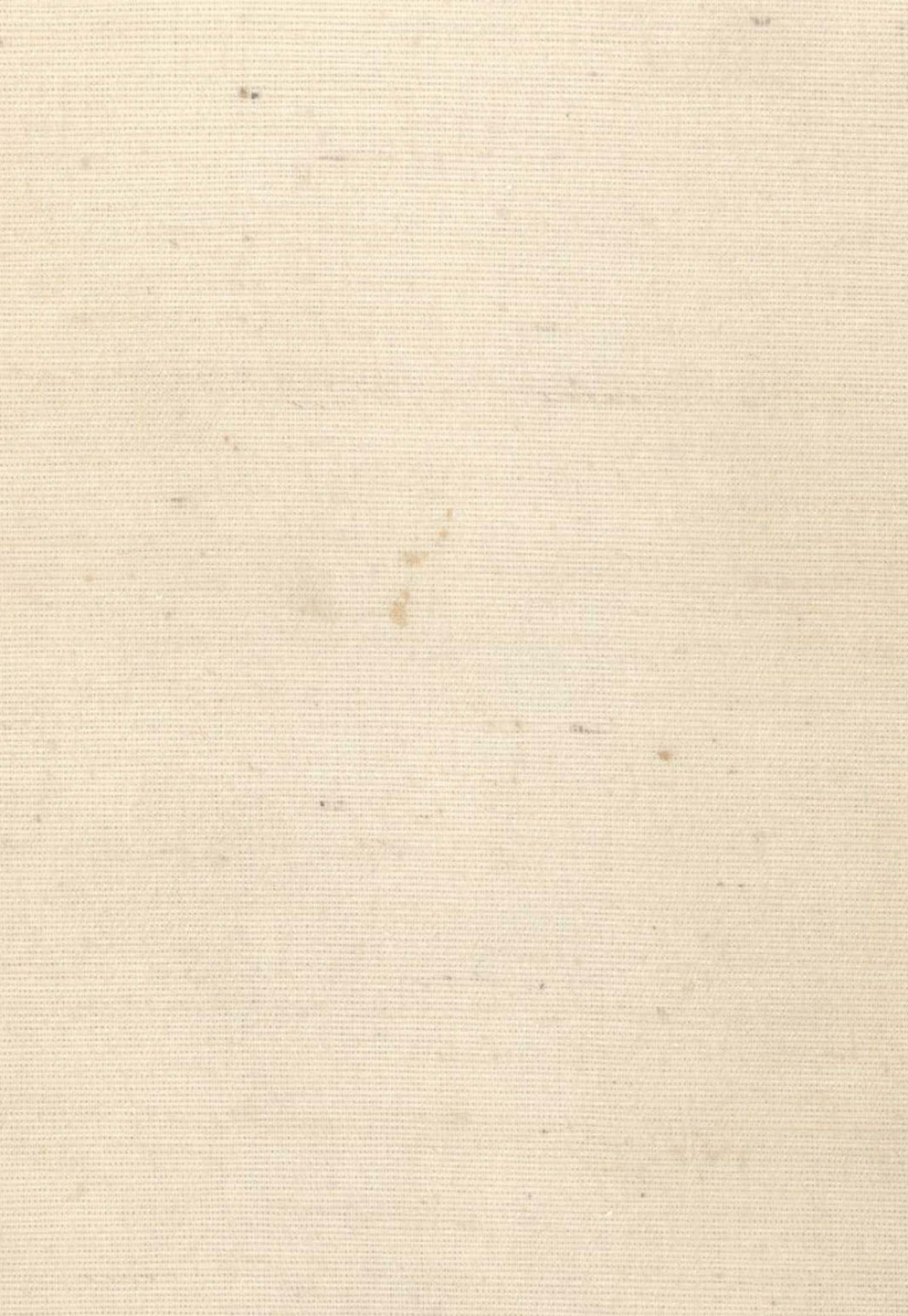




庄野潤三

絵合せ

講談社

絵合せ

昭和46年5月24日 第1刷発行
昭和46年12月8日 第5刷発行

著者 庄野潤三

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号 112

電話 東京 (945) 1111 (大代表)

振替 東京 3930

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 有限会社文信社

定価 650円 落丁本・乱丁本はおとりかえします。

© Junzō Shōno 1971

Printed in Japan

目次

絵合せ

9

蓮の花

109

仕事場

137

カーソルと獅子座の流星群

155

鉄の串

185

父母の国

205

写真家スナイダー氏

225

グランド・キャニオン

251

あとがき

271

装幀 枡折久美子

庄野潤三
作品集

絵合せ

絵 合 せ

一

炬燵で宿題をしている良二が、うつむいている顔を上げて、何か考えようとする、額に不揃いな皺が寄る。

小学二年の時に（いまは中学二年だが）、学校の廊下を走っていて、友達とぶつかって大きなこぶが額に出来た。友達の方は前歯がぐらぐらになった。

どうしてそんなに勢いよくぶつかったんだろうと思うが、良二の話によると、

「ぼくが走って来たら、向うから豊田君がかけて来て、それでぶつかった」というのであった。

よけられなかったのかと聞くと——あとでそんなことを聞くのも間が抜けているが——そこは狭いところであったという。

どうしてまた、よけられないくらいの速さでそんな狭いところを走ったのかと聞くと、便所へ行くところであったという。それなら、ぶつかった豊田君は便所から帰って来る途中だったのかと聞くと、そうらしいというのであった。

このこぶがうんと大きなこぶで、冷やしているうちにだんだん小さくなったが、最後にそれ以上は引込まないという、こぶの根のようなものが残った。

それは、気にしなければ、そのままでも差支えないが、あとで、

「こいつ、おでこに角を生やしている」

といわれるようになるかも知れない。

それなら、いまのうちに切っておいた方がいいでしょうと外科のお医者さんがいった。それで、「角切り」をして貰った。

この手術の時に、彼と一緒に行った小学六年の明夫は、そばではじめからしまいまで見ていて、

「痛かったら、痛いっていうの」

といったり、良二が泣き声を出しそうになると、

「我慢して。もうすぐだから」

といった。

兄貴顔していつている明夫が、ついその二月前に、これも考えられないような怪我をした。片足で「けんけん」をしながら走って行って、朝礼台に飛び上ろうとして、コンクリートの角に足をぶつけて落ちた。その拍子に向う脛の皮が大きく切れて、下へ垂れ下った。

受持の先生が、この外科医院まで明夫を背負って連れて行ってくれた。はじめにレントゲンをかけて骨折がないかどうか調べてから、垂れた皮を引っばり上げて縫い合せた。二十針ほど縫った。

向う脛にかぎ裂きをつくったようなものであった。それが今度は、弟を励ましている。

父親の彼は、お医者さんのしていることも良二の方も見ないで、うしろから明夫の顔を見ていた。だいたいそれでどんなふうに進んでいるか、見当はつく。

一度だけ明夫がそっと顔をそむけた時があった。あとで、

「あの時、何をしていたんだ」

と聞くと、メスで切り取ったところから血が湧き出て来るのが見えたといった。

なるほど目を外らしたのも無理はない。

（明夫の怪我の時も、彼は診察室の中にいながら、横を向いていた。傷口に麻酔の注射を打つところも、縫い合せるところも見なかった。そうして、「アリババと四十人の盗賊」に出て来る賢い女中のモルギアナが、殺された旦那さまのカシムを元通りにするために、腕のいい仕立屋のおじいさんを眼隠ししたまま連れて来る場面を思い出し、これは縁起でもないとい急いでその考えを打ち消した）

「角切り」のあとは、いずれ額の皺の一部分となって、目立たなくなるでしょうというのが、お医者さんの意見であった。

いまはどうだろう。いちばん深い皺が二本寄る。川の流れは「角切り」のあとをほんの僅かよけて、迂回したように見える。そこだけ、川幅が少し広くなる。

良二の額に不揃いな皺が寄るといったのは、つまり、そういう由来があるのだが、取り立てて問題にするほどのことはない。

明夫はうんと顔をしかめないと、皺らしいものが出来ないのに、良二の方は小学生のうちから彫りの深い皺が寄るようになった。外科の先生のいった言葉が、暗示となって働いたのだらう

か。

三月中ごろの或る晩、その良二が不意に「サンタ・ルチア」をうたい出した。

ついさっき会社から帰って、ひとりで遅い夕食を食べた姉の和子も細君も彼も、みんな呆気に取られた。歌は途中でとまったが、和子は、

「いいわ。いいわ」

といい、もう一回うたつてと頼んだ。

「どうしたの、それ？ 学校で習ったの。全部うたえるの、原語で。大したものね」

すると、良二は音楽の時間に女の先生がうたつてくれたのだといった。

「教科書にのっているの？」

「教科書にのっているのは、ただの日本語なの。それで先生が、その、イタリア語でうたつて」

「教えてくれたの」

「そう」

「うたつて」

今度は、良二は恥しくなつて、うたわない。

「いいから、うたって」

そんなふうに改まっていわれると、声が出ない。和子と細君に二人がかりで催促されて、良二はうたわないわけにゆかなくなった。

で、蜜柑の入っていた竹の籠を取って、顔にかぶると、もう一度、始めからうたった。

竹の編み目から声変りのした子供の、いくらか間伸びのした声が聞えて来る。これは一向にナポリ民謡らしくないうたいかたで、地味すぎるといえば地味すぎる。

もともと良二は、わらべ歌くらいが似合っている。不意に家の中でこの子がうたい出すのは、いつも学校で習った曲にきまっているが、その中にいくつか、わらべ歌があった。

二月くらい前になるが、何かの拍子にそのひとつを思い出した。「四けんじょ」というので、九州地方のわらべ歌である。

「一けんじょ　二けんじょ

三けんじょ　四けんじょ」

というので、それだけ聞いたのでは何のことだか分らない。

これは、良二が小学五年のころに習った。やっぱりその時も家の中で出し抜けにうたい出し